行燈、ゆらり工芸品、小物ずらり

115年の歴史刻む株式会社カキモト（三郷町）
併設のギャラリー「Ｋａｗａｒｉ」店長
垣本麻希さんに聞く

明治40（1907）年に「村の鍛冶屋」としてスタートした金属加工業の株式会社カキモト（三郷町立野北2・垣本昌孝代表取締役）は、今年で創業115年を迎えた。長い歴史の中で直面した最大の経営危機が、平成20（2008）年のリーマンショック。窮地に追い込まれたが、翌年に新規事業として金属工芸品の製造を開始したことが、カキモトの屋号を守った。工場併設のギャラリー「Ｋａｗａｒｉ」は創業当時をほうふつとさせる立派な大和棟の建物。「華倭里」のブランドで行燈（あんどん）など数々の工芸品を展示、販売している。店長の垣本麻希さん（45）に話を聞いた。

リーマンショックの窮地救った「華倭里」

―ブランド名「華倭里」に命名したいきさつは。

ギャラリーについては平成25（2013）年に立ち上げました。「奈良らしさが伝わるブランド名を作りたいな」と思いまして。華やかにヤマトの里。卑弥呼のイメージです。商品自体も面白いものにしたいと思いました。行燈の絵柄が4面入っていて、入れ替えができたりします。変えて楽しめたり、遊び心があったり、そういう変わっている、ノーマルではない、工芸品という意味も込めて名前を付けました。

■　■　■

―リーマンショックからの立ち直りのきっかけとなった行燈や「ゆらり工芸品」の発想はどこから。

何を作るかと考えたとき、ここは奈良じゃないですか。奈良と言えば燈花会。灯り。地元の信貴山と言えば寅（とら）。張り子の寅。それを金属でやってみたらどうかなという、発想でした。

金属のゆらゆら揺れる工芸品。12年前に張り子の寅をイメージして作ったのは「ふりとらくん」と名付けました。奈良にちなんだキーホルダーグッズも作りました。オファーもあり、地元の商工会の協力を取り付けながら、百貨店の商談会など、販売ルートをどんどん広げていきました。

本業の方もちょっとずつ回復していきました。その当時、お給料の支払いも大変で、私財でやりくりしていました。一人も辞めさせずに。やっぱり「人財」って大切なんですね。

■　■　■

―行燈へのこだわりは。

やっぱり、これを見て奈良を感じてもらいたいですね。奈良を好きになってもらいたいんです。感動を与えるものを作りたいと思うので、そうじゃないものは店頭に並べないこだわりです。お客さんのニーズに合ったものづくりが根底にあります。

それで、なんとしてでも日本製というのを大事にしたいので、材料も全部、ちゃんと工業製品の認定の取れた安全なものを使っています。中のライトも全部大阪の方で作っていただいています。部材などにもこだわっています。

■　■　■

―一つ一つの商品は企画・デザインで決まりますね。

華倭里行燈には「奈良の情景・文様」「奈良八重桜」「万葉歌」「雪の調べ」「文様」「宝燈箱」「六華鏡」「万葉～リーフ文様～」「万華鏡～花文～」「光芒」「Ｔａｌｌ　Ｔｙｐｅ」「プレミアム」――の各シリーズがあります。ほとんど奈良の絵柄を行燈の絵に落とし込みます。

ロゴマークや看板など金属でできるものを、だいたい企画して作っています。龍田大社拝殿につるしていただいている龍田鉄風鈴「風の音」は、龍田古道の認定商品にしていただいています。とても良い音が鳴りますしこれが一番売れている感じです。

■　■　■

―どのような制作手法なのですか。

鉛筆による手書きで全部描いていって、デザインソフトでトレースしていきます。それをうちの機械、レーザー加工機でカットできるようにしていきます。全てチェックして、制作に入るのです。すごく細かい絵柄です。一枚板から絵を描いていきながら切っていきます。複雑で時間がかかります。

本業と全く違うモノづくりですが、材料や作っている機械、職人さんは本業と一緒。本業の技術を生かして創作しているという面では同じです。職人さんたちもやったことがないことばかりで、一個一個の試作品づくりが大変でした。

■　■　■

―ところで、値段の方は。

「ふりとらくん」は色が6種類で、それぞれ小、中、大、特大があります。やっぱり黄色とゴールドがよく出ますね。黄色の小で1430円（税込み）、ゴールドの小は1650円（同）。行燈の一番大きいタイプはステージに置いていただいたりして、結構人気のあるものです。一番高くて25万円ぐらいです。通常のサイズのものだったら3万円台からあります。

■　■　■

―どういうところから引き合いがありますか。

宿泊施設さんなどが多いですね。お部屋に飾っていただいたり、名前が入っていたり、一点ものもあります。

㊤今年は寅年。ゆらり工芸の「ふりとらくん」のキイロ種㊦ギャラリー「Kawari」

それから、「あんまり知られていない特別な商品を探しています。他では売っていないものを販売させてください」という問い合わせがあります。向こうからお電話があって、行かせてもらうという形です。オファーがあったら、必ずお応えさせていただこうと思っています。

■　■　■

―ホームページで商品案内されていますが、反響はどうですか。

メールをいただきますが、だいたい皆さん、ここへ来たいと言われます。そばに龍田大社があって、お参りコースの中にギャラリーを入れてくださったりで。逆に、ここへ来て龍田大社を初めて知るお客さんもいます。結構、関東の方も多くて、ありがたいなと思っています。

■　■　■

―将来の夢は。

奈良と言えば、シルクロードでつながっています。だからイタリア、トルコなどのシルクロードの道、龍田古道がまさにそうなので。そういったところとの交流などを自分がしてみたいなと思っていますので、そちらの方での行燈の作品展をさせていただき、作品を通じて文化交流をしたいです。

㊤「龍田大社がそばにあり、ギャラリーに直接来ていただき、製品を見ていただければ。工場見学もできます」と話す店長の垣本麻希さん㊦ブランド華倭里行燈・奈良八重桜